

## 夏季離島実習事後レポート

私は今回、下甕島の手打診療所で5日間の夏季離島実習をさせていただきました。下甕島は、鹿児島県川内市の川内港から沖合約50キロにあり、島へのアクセス手段は高速船とフェリーである。

1日目は川内港から高速船に乗り、1時間30分かけて下甕島の長浜港に着いた。午後からは外来の見学をさせていただきました。診察の際、内村先生が患者さんの話を丁寧に聞き、患者さんの不安要因を取り除こうとされていたのが印象に残っている。

2日目は外来見学のあと、甕島敬老園に連れて行っていただいた。入院を必要としない健康状態であるものの、やむを得ない事情で在宅での生活が困難な方のための養護老人ホームと日常生活において常時介護が必要で、在宅では介護が困難な方のための特別養護老人ホームがあった。短期入所もでき、お年寄りの人口の多い下甕島の支えとなっていることが分かった。書道をされたり、絵を描いたりされている様子を見て、家でなくても、自分らしく生活できることが大切だと思った。

3日目は主に透析の見学をさせていただきました。手打診療所では、週に3回透析を行っており、症状の重い患者さん以外は島内で血液透析を受けることができる。島内で透析を行うことで、移動における患者さんの心身の負担、経済的負担などを軽減することができる。島内で可能な限り医療を提供し、患者さんの負担を軽減させようとするのが大切だと思った。

4日目は訪問診療で、瀬々野浦診療所と片野浦診療所での診察の様子を見学させていただきました。車で片道30分ほどのところにあり、車を持たないお年寄りが手打診療所まで行くのは非常に困難だと感じ、訪問診療の重要性を学んだ。診療所の待合室での様子がとても印象に残っている。和気あいあいとした雰囲気とても賑やかだった。内村先生が「2週間に1度の訪問診療のときにしか外出しないお年寄りが多いから、待合室は住民の交流の場として大切なんだよ。」とおっしゃっていた。

5日目は下甕島の鹿島を訪れ、現在建設中である下甕と上甕を結ぶ橋を見た。この橋によって下甕の医療状況も変わるということを知って、交通の発達により、医療も大きく左右されるということに気付いた。

今回の実習を通して、地域医療の大変さ、それと同時に多くの魅力を感じた。地域医療は住民の人生に寄り添っていると思った。体の不調を感じた時に、いつでも相談できる医師がいることが大切だと内村先生が診察される姿を見て思った。実際に下甕島を訪れたことで、患者さんとのコミュニケーションのとり方や地域医療における医療の役割を知ることができた。今回の実習を通して学んだことを忘れずに、大学での勉強に励んでいきたいと思う。

居続ける その意志こそが 支えとなる

内村先生が、地域に医師が居続けることが大切だとおっしゃっていました。体調を崩し、不安を感じたとき、すぐに相談できる医師がいることが大切だと思ったのでこの句を詠みました。

## 事後レポート～夏期地域枠実習～

今回、私は夏期地域枠実習で下甕島の手打診療所を訪れた。下甕島に行くこと自体初めての経験で、鹿児島中央駅から川内駅までJR鹿児島本線で約50分、川内港行きバスで約30分、川内港から長浜港まで高速船で約1時間半、長浜港から手打診療所までバスで約20分かけて初日は到着した。下甕島には手打診療所の他に長浜診療所があり、手打診療所の基本理念にあるように地域医療の拠点として地域医療を推進し、離島住民の医療に対する不安をなくす役割を担っている。手打診療所の前医院長だった瀬戸上健二郎先生は漫画やドラマになったDr.コトーのモデルにもなった。下甕島で数日過ごす中で島民の誰もが瀬戸上先生のことを知っていて、信頼を寄せられていたのだということを実感した。下甕島に来て2日目はまずナースステーションにて申し送りがあり、外来の患者さんの血圧測定をしたり、胃カメラで食道、胃、十二指腸までを撮影するのを見学したり、胃瘻交換、心電図の見学をした。午後は甕島敬老園に行った。甕島敬老園は介護の度合いによって養護老人ホームと特別養護老人ホームの二つに分けられているようだった。施設に入った途端、お年寄りの皆さんの楽しそうな話し声や笑い声が聞こえて、私が想像していた老人ホームとは大きく違っていた。老人ホームというよりお年寄りの皆さんが共同で住む一つの家みたいだと思った。3日目は医院長先生と研修医の皆さんと懇親会を開いていただき、将来自分たちも研修医の先生方のように地域でしか学べないようなことをたくさん吸収していきたいと思った。4日目は瀬々野浦診療所と片野浦診療所に行き、遠方に住んでいる患者さんの診察をおこなった。医師が足りていない地域ならではの形だと思った。午後は愛甲先生の講演会があり、懇親会も通して、地域医療やこれからの私たちの将来についてのお話を聞くことができた。5日目は下甕島の観光をした。自然豊かな下甕島で海に行ったり、瀬尾観音の滝を見たりと満喫することができた。

この夏期地域枠実習を通して、離島僻地では医師の数も物資や設備も不十分である中で地域でできる最良の医療を患者さんやその地域に住む人々に提供することが必要になってくるのだと改めて感じた。私たちはまだ医学については何も学んでいないが、生まれ育った鹿児島県のためにこれからの学びを充実したものにしたい。

〈短歌〉

変わるもの 変わるものが混ざり合う

甕の海に 名医を見る

〈短歌の背景〉

若い人が島を出て行ってしまったり、小学校が廃校となってしまうたりしても、島には変わらない人々の家族のような絆や温かさがあり、下甕島でかつて島民のために尽くしたDr.コトー、瀬戸上健二郎先生や現医院長の内村龍一郎先生のように「先生がいてくれればいい」と思ってもらえるような医師になりたいと強く思った。